

弓削

繁編

平家物語

上

古典
文庫

平

家

物

語

弓
削

繁
編



上

古
典
文
庫

平成九年六月二十日印刷発行

非売品

編者 弓削 繁

発行者 吉田 幸一

印刷者 白橋印刷所

製本者 共伸 舎

語 物 家 平
上

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古 典 文 庫

電話 〇三(三九一〇)二七一七
振替口座東京〇〇一九〇九一二四五九七番

平家物語 上

相模女子大学本

目次

凡例	五
平家物語 第一	七
平家物語 第二	一〇七
平家物語 第三	一九九
平家物語 第四	三三三

凡例

一、本書は、相模女子大学附属図書館蔵『平家物語』の翻刻である。

二、翻刻にあたっては、次の方針に従った。

- 1 底本は続け書きであるが、巻頭の目次に従って章段を分かち（一）内に章段名を補った）、また適宜段落を区切った。
- 2 巻頭の目次の下に、本書のページを補った。
- 3 底本には句読点・鉤括弧等はないが、読解の便を考えて私に付した。
- 4 底本の旧字体は現行字体に改めた。ただし、異体字・略字の中には底本のままにしたものもある。
- 5 仮名および漢字に部分的に濁点が付されているが、これらはすべて省略した。
- 6 反復記号は底本の通りにした。
- 7 振仮名・振漢字等は底本の通りにした。

8 ミセケチ・補入は改められた形を尊重した。

9 底本の改丁は、その終わりに、「」を付し（1オ）（1ウ）のように示した。

三、本書を成すにあたり、貴重な蔵書の翻刻をお許し下さった相模女子大学附属図書館をはじめ、口絵を名筆でお飾り下さった水原 一氏、並びに種々学恩を蒙った杉本圭三郎・笠 栄治・松尾葦江・千明 守の各氏に厚くお礼申し上げます。

平家物語第一

殿上 てんしやう のやみうち……………	九
平家 へいけ のゑいくは……………	三
妓王妓女 きわうきによ ……………	六
二代 にたい のきさき……………	四
額 かく うち論 ろん ……………	五
殿下 てんか ののりあひ……………	四
ししのたにのむほん……………	七
鵜河 うかう いくさ……………	五
後二条 こにてう の関白 くはんはく 殿願立 とのくはんだて ……………	八

御 み こしふり……………	四
大内裏 おほたいり ゑんしやう」(一ウ)……………	一〇

(殿上てんしやうのやみうち)

祇園精舎きをんしやうしやの鐘かねの声こゑは諸行無常しよきやうむしやうのひゞきあり。娑羅双樹しやらさうしゆの花の色いろは盛者必衰しやうしやひつすいのことはりをあらはす。おこれる人も久すからず、たゞ春はるの夜よの夢ゆめのことし。たけきものもつるにはほろひぬ、ひとへに風のまへのちりにおなし。とをく異朝いてうをとふらへは、秦しんの趙高てうかう・漢かんの王莽わうまう・梁りやうの周伊しうい・唐たうの禄山ろくさん、これらはみな旧主先皇きうしゆせんわうのまつり事ことにもしたかはす、たのしみをきはめ、いさめをもおもひ入れす、天下てんかのみたれん事をさとらずして、民間みんかんのうれふる所ところをもしろさりしかは、久ひさしからずしてほろひし者共ものともなり。ちかく我朝わかくてうをうかゝふに、承平せうへいの将門まさかた・天慶てんきやうの純友すみとも・康和かうわの義親よしちか・平治へいちの信賴のふより、おこれる事」(2オ)もたけ

き心も、みなとりく／＼にありしかとも、まちかくは六はらの入道前にうたうさきの太政大臣平の朝臣清盛公と申し、人のありさま、つたへうけ給るこそ、心もことはもをよはれね。

その先祖せんそをたつぬれば、桓武天皇第五の皇子わうし、一品式部卿いつぽんしきふきやうかつらはらの親王しんわう、九代の後胤こういんさぬきのかみ正盛まさもりか孫まこ、刑部卿忠盛きやうぶしんのあつそのんのちやくなんなり。かの親王しんわうの御子高見みこたかみの王わう、無官無位むくわんむゐにしてうせ給ぬ。その御子高望みこたかもちの王わうの時、はしめて平たいらの姓しやうを給りて、かつさのすけになり給ひしより、たちまちに王氏わうしを出て人臣しんしんにつらなる。その子鎮州府ちんしゅうふの將軍義茂しやうくんよしもち、後のちには国香くにかとあらたむ。国香くにかより貞盛さだもり・維衡これひら・「(2ウ)正度まさのり・正衡まさひら・正盛まさもりにいたるまで六代たいは、みな諸国しよこくの受領しゆりやうたりしか共、殿上てんしやうの仙籍せんせきをいまたゆるされす。

しかるを忠盛備前のかみたりし時、鳥羽のゐんの御願、徳長寿院を造進して、三十三間の御堂をたて、一千一たいの御ほとけをすへ奉つる。供養は天承元年三月十三日なり。勸賞には關国を給るへきよしを仰くたされける。おりふし但馬の国のあきたりけるを給りにけり。上皇御感のあまりに、内の昇殿をゆるさる。忠盛三十六にてはしめて昇殿す。

雲の上人これをそねみ、同年十一月廿三日、五節とよのあかりのせちゑの夜、忠盛をやみうちにせんと擬せられけり。忠盛「(3才)これをつたへ聞て、「我右筆の身にあらす。武勇の家に生れて、いまふりよのはちにあはん事、家のため身のため、心うかるへし。詮する所、身をまつたくして君につかふといふ本文あり」とて、かねてよいを

いたし、参内さんないのはしめより、大おほきなるさやまきをよういして、そくた
いの下したにしとけなけにさし、火ひのほのくらきかたにむかひて、やはら
此かたなをひむにひきあてられけるか、こほりなどのやうに見えける。
諸人しよにんめをすましける。

そのうへ忠盛たうちもりの郎等らうとう、もとは一門いちもんたりし木工むくのすけたいらのさたみ
つか孫まこ、新三郎しんさん大夫たいふいへふさか子こ、さ兵衛ひやうゑの尉せういへさたといふ者ものあ
りけり。うすあ」(3ウ)をのかりきぬのしたに、もえきおとしのはら
まきを着き、弦つるふくろ付つけたる太刀たちわきはさんて、殿上てんじやうの小庭にはに畏かしこまつて
そ候ける。貫首くわんしゆい以下けあやしみをなし、「うつほはしらより内うち、すゝの
つなのほとりに、布衣ほういのものゝ候はなに物ぞ。狼籍らうせきなり、まかり出いで
よ」と、六位ろくゐをもていはせけければ、貞家さたいへ申けるは、「さうてんの

主備前守殿、こよひやみうちにせられ給ふへきよしうけ給候しあひた、

そのならんやうをみるとてかくて候。ゑこそまかり出ましけれ」とて、

畏かしこまつて候ければ、これらをよしなしとや思おもはれけん、その夜のやみ

うちなかりけり。

忠盛御前のめしにまはれければ、人々ひやうしをかへて、「いせへ

いしはすかめなりけり」とそはやされける。此人々はかけま（4オ）

くもかたしけなくも、柏原かしはらの天皇てんわうの御すゑとは申なから、中比なかくらみや

このすまひもうとくしく、地下ちかにのみふるまひなつて、伊せいせの国くにに

住国ちうこくふかゝりしかは、その国くにのうつは物に事よせて、伊せいせへいしとそ

申ける。そのうへ忠盛たうもりの目めのすかまれたりければ、かやうにはやされ

けり。いかにすへきやうもなくして、御遊きよゆふもいまたおはらさるに、ひ

そかにまかり出らるゝとて、よこたへさゝれたる刀を、紫震殿の御
うしろにして、かたへの殿上人の見られける所に、とのもつかさを
めして、あつけをきてそ出られける。家貞まちうけて、「いかゝ候つ
る」と申ければ、かく共いはまほしう思はれ共、いひつる物なら
は、殿上ま（4ウ）てもやかてきりのほらんするものにてあるあひ
た、「へちの事なし」とそこたへられける。

五せちには、「しろきうすやう、紅浅深のかみ、まきあけのきぬ、
ともゑかいたるふてのちく」など、さま／＼おもしろき事をのみこそ
うたひまはるゝに、中比太宰の権の帥すゑなかのきやうといふ人あり
ける。あまりにいろのくろかりければ、みる人黒帥とぞ申ける。その
人いまたくらんとのかみたりし時、五節にまはれければ、それもひや